令和６年度第２回倉敷市立自然史博物館協議会　議事録（要旨）

開催日時）令和６年９月１９日（木）１３時３０分～１５時３０分

開催場所）倉敷市立自然史博物館地階講義室

報告事項）「新自然史博物館・ライフパーク倉敷整備基本計画（案）」について

出席委員）碇京子委員、石垣忍委員（会長）、尾﨑勝也委員、片岡博行委員、末宗安之委員、宮原勝志委員、山野ひとみ委員

欠席委員）小野恭一委員、西山圭子委員、吉岡勉委員（副会長）

事務局）森茂治生涯学習部長、杉本紀明館長、三谷潤二郎主幹、奥島雄一主幹、武智泰史主幹、萩原知博主任、江田伸司学芸員、鐵慎太朗学芸員

傍聴者）なし

議事録（要旨）

１　開会

事務局

　これより令和６年度倉敷市立自然史博物館協議会を開催する。

２　開会あいさつ

事務局（生涯学習部部長）

　ただいま紹介いただきました倉敷市教育委員会生涯学習部長の森でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本年第２回目となりました自然史博物館協議会の開会にあたり、委員の皆様方には、お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。また、日ごろから自然史博物館の運営、本市の生涯学習の推進につきまして、平素からご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。重ねてお礼申し上げます。

　さて、本市では令和４年３月に「倉敷市公共施設個別計画」を策定させていただいております。その計画の中で、この自然史博物館はライフパーク倉敷に移転し、機能を複合化していくという方針が定められました。この８月ですけれども、この整備に対する基本的な考えを市の方でまとめさせていただき、「新自然史博物館・ライフパーク倉敷整備基本計画（案）」として公表させていただいております。この案の中では自然史博物館はライフパーク倉敷に新築移転させていただいて、移転先となったライフパーク倉敷は本市の「知の拠点」となるよう取り組んでいくとさせていただいております。ライフパーク倉敷の方でも「自然史博物館」「科学センター」「埋蔵文化財センター」「市民学習センター」が一体となって本市の生涯学習の拠点施設となるよう、取り組んでいきたいと考えております。本日はこの基本計画の案について担当から説明させていただきます。委員の皆様方にはこの案に対する、専門的な立場、多角的な視点から、貴重なご意見を賜りたいと思っております。いただいたご意見をもとに新自然史博物館の整備について生かしていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いします。最後になりましたが、今後とも、委員の皆様方には、自然史博物館の運営・活動にご支援・ご理解、そして応援をいただきますよう、お願いを申し上げて、簡単ではありますがご挨拶とさせていただきます。今日はよろしくお願いします。

３　会議成立

司会進行

　過半数に達しておりますので、倉敷市立自然史博物館条例施行規則第１４条第６項の規定により、会議は成立しております。

４　報告事項

会長

　「新自然史博物館・ライフパーク倉敷整備基本計画（案）」について事務局から説明をお願いする。

事務局

基本計画は本編、展示計画の２つに分かれている。倉敷市公共施設個別計画の方針で自然史博物館はライフパーク倉敷に移転する。この方針を受けて令和４年３月に策定した「ライフパーク倉敷リニューアル及び新自然史博物館整備基本方針」からこの基本計画ができた。これは当館学芸員をはじめとした自然史博物館職員による検討のほか、来館者アンケート、庁内検討チームによる意見交換、自然史博物館協議会など、様々な方にご意見を伺い、まず現状の課題の整理を行い、進めてきたものである。

本編について）

これはライフパーク倉敷の整備と、新自然史博物館の整備に分かれる。ライフパーク倉敷が目指す姿として、「あなたの知りたい」に応える「知の拠点」をめざすこととしている。

ライフパーク倉敷の整備について具体的に説明すると、現在の市民学習センターの図書室は一部を新自然史博物館のエントランス・受付・事務所・特別展示室として活用し、自然史博物館として活用しない図書室部分は図書コーナーとして自然史博物館部分と壁などで区切ることなく、引きつづき、予約資料の貸し出しや図書館資料の返却などといった公民館図書室としての機能を残し、だれでも本が閲覧できる場所とする。市民学習センターの団体見学室兼団体交流室は廃止し、新自然史博物館の工作室・講義室とする。そして、自然史博物館・市民学習センター・科学センター・埋蔵文化財センター間の動線の確保、バリアフリー化やサイン表示の見直しを行い、スムーズに移動できるような案内表示を行なう。今後、校外学習などの団体客が増加することが考えられ、待機休憩スペース不足解消のため、今の市民学習センターの軽トレーニングルーム・シャワー室・更衣室の部分を、ライフパーク倉敷の共有スペースとして活用する。また、市民学習センター・埋蔵文化財センター・新自然史博物館を結ぶ館外敷地部分を団体客の待機スペース等として活用する。今のライフパーク倉敷北側出入口前のロータリー部分は新自然史博物館の建設予定地になるため、このロータリーは東側出入口前のスペースに移設し、そこには車いす利用者や妊産婦など、歩行が困難な人が利用できるバリアフリー駐車場を４～５台程度併設する。校外学習等でバスで来場する団体利用者のため、北側大型バス駐車場を３台分程度拡張する。

新自然史博物館の整備については、倉敷市立自然史博物館協議会において収集保管活動の充実が求められており、適切な収蔵環境を整えることが必要である。収蔵庫は新館部分に設置を考えている。寄贈品の増加等による資料の保管は他の施設を併用しながら運用する。基本計画では新自然史博物館における収蔵庫はあくまで、来館者に見てもらうため、あるいはその準備としての収蔵スペースとして位置づけている。館内の収蔵庫の面積は現自然史博物館よりも少し大きい約３００m^2を考えているほか､防虫･防カビや耐震性･耐火性など最新のものを検討していきたい。

以上の総事業費は令和６年７月時点で約２８億円で、この中で新館建設・ライフパーク倉敷の改修・外構整備に加え、新しい自然史博物館の展示を行っていく。供用開始は令和１１年度としている。なお、今後、建築や展示の事業者を募集するにあたり、この期間で工事が可能か、事業費が適正かなど、サウンディングしつつスケジュールの検討をすすめていく。

展示計画について）

コンセプトとしては、地球誕生の４６億年前からこれまで発生した生物８０００万種のクロス

ポイントに倉敷の今に生きる自分が存在し、そのつながりが未来へと連綿とつながりかかわっていることを来館者に感じてもらい、思いをはせてもらえる博物館展示を目指す。

資料には円柱のピラミッドで展示の構成を示しており、これは基本計画で示した、知りたい・学びたい・楽しみたい・という来館者の自然史への興味、関心の度合いを示している。新しい博物館では、まず自然史に肩ひじを張らず、気軽に楽しんでいただける導入展示をスタートとし、身近な倉敷市や高梁川流域の自然や生き物を感じてもらえる総合展示や分野展示、さらには調査研究の深い部分への興味へ答える活動など、ライトユーザーからヘビーユーザーまで興味の度合いに応じた様々な入り口を用意し、そしてそれらの展示を通して来館者が知らず知らずのうちに自然史への興味関心を高める、工夫の詰まった展示を行いたい。また、左下に展示テーマとあり、当館の１００万点を超える収蔵資料を１点でも多く、来館者に見てもらいたい、見てもらうため、博物館丸ごと標本の森を展示テーマとして設定している。

具体的な主な展示内容としては、導入展示が「生命の大行進」で、ダイナミックな大型標本によるスケール感のある展示を行い、来館者の興味を引き付ける役割を担うゾーンとする。「倉敷の自然」は高梁川流域の自然や生き物の多様性を紹介する総合展示ゾーンで、流域の自然をジオラマなどで再現し、身近な自然や生き物を知ってもらい、生き物たちの互いのかかわりやつながりを感じてもらう。「大地と生きもののふしぎ」は、当館のもつ地学・動物・昆虫・植物の知見について展示をとおして来館者に学んでいただける分野展示である。学芸員による更新を可能な造りとし、新しい学説や発見にも対応できる展示を目指したいと考えている。博物館探検ギャラリーでは、収蔵展示として、見える収蔵庫など、収蔵を展示の一部ととらえた整理を考えており、市民参加型標本展示など、博物館の中の人間だけでない、市民や自然史の愛好家を巻き込んだようなものができれば良いと考えている。

施設計画および配置計画では具体的なゾーニングや館内動線を示している。「倉敷の自然」、「大地の生きもののふしぎ」については一方通行の動線だけではなく、どこでも入れる、どこでも出られる、という工夫も行い、興味や関心によってさまざまな箇所に入り口と出口があることで、興味の度合いに応じて自由に行き来できるという動線も可能と考えている。

資料には導入展示の「生命の大行進」で展示を予定している大型の標本について詳細を記入しているが、展示される標本については今後になる。

会長

今の説明に関してそれぞれの委員から質問・ご意見をいただきたい。

委員

収蔵庫面積が現在の博物館のものと同等ということだが、同等とは、今の収蔵品を入れるとすぐにあふれる状態になる。さらに寄贈であふれるまで、どの程度の余裕を、時間的余裕を見込んでいるか。他の施設を併用しながら運用するという説明があったが、どういった施設を想定されているか。実際使える施設があるか。それとも何か新しい取り組みをしなくてはならないか。

事務局

計画では面積は今より少し大きい程度だが、天井が今より高く、標本の配置の工夫もできると

考えている。今の自然史博物館の建物は旧水道庁舎で、博物館の設計ではない。なお、収集保管計画では寄贈品をどんどんためていくという収蔵庫ではなく、見てもらって、展示準備のためのスペースという事なので、今後増加が見込まれる寄贈品などについては休校・廃校などの教育施設を併用ということになる。

委員
　大高仮収蔵庫のようなものか。

事務局
　そのようなイメージのところを確保して、しっかりと収蔵については対応していきたい。

委員
　大高仮収蔵庫のような建物を活用する方法もある。移転先は大学が近く、大学と倉敷市で何らかの協定をしてもらい、大学では収蔵スペースを提供して自然史博物館の収蔵品を活用したカリキュラムをつくると倉敷市側の努力だけではなく、より適切な管理がなされると思う。特に古生物とかの骨格標本は大学に造形の学科もあるから、骨格標本を見て造形のインスピレーションを受ける学生もいるかもしれない。そういった視点で提案できるかと思う。
　見せるための収蔵庫はいくらでも受け入れができないのは理解するが、市立の博物館である以上、市民が寄贈することができなければ市立の博物館としての意義が少し弱くなってしまう。市民から預けられる・寄贈ができる博物館というのは必須条件と思う。見せるかどうかは別にして、収蔵スペースは別施設でもいいので、先を見ながら、必ずあらかじめ準備していっていただきたい。見せる収蔵庫は現状のようにあふれた様子を見せるわけにはいかないので、収蔵スペースを裏で確保するのは重要。早め早めに予測しながら動いていっていただければと思う。

会長
　収蔵庫に関連してほかに意見はないか。貴重な標本を受け入れ続けて１００万点に達し、それだけの信頼を確立しているのがこの倉敷市立自然史博物館だと思うし、その信頼感はおそらくそう簡単には構築できない。それが未来に対しての責任ある拠点、研究拠点、教育拠点になっていく証でもある。そこを見てもらうのは重要だが、中の管理、空調とか、面積が有効活用できるものを作っていただきたい。ここは旧水道局庁舎で天井が低いが、ほかの博物館の収蔵庫で、例えば中２階みたいな形式で面積を増やしたりする工夫をしている所は何度か見た。
　他の施設の併用で、今の委員の意見のように大学と連携する話もあるが、博物館の標本は博物館学芸員による一元管理が必須だと考える。そのコントロールをした上で、管理しやすいものは外で管理というのは現実的な解決策としてはあると思う。私は化石をやっているが、岩石・化石は空調はあまり気にしなくても良いところもある。ただセキュリティ管理が必要で、すべて予算といった問題の制限を受ける。あくまで未来への貴重なものを預かっている、活用していくという姿勢だけは守って展開してほしい。

委員

重要な標本は大学に置いて大丈夫なのか、というマネジメントというか管理の仕方とか、そういうのをしっかりしたうえでなら良いが、そう簡単にいく話かというとそうではない。何か一緒にできないかというのは考えられなくもない。使っていない学校の建物などは市民に活用され、博物館と連携できればよい。可能ならできることから相談してしっかり詰めていければ。

委員

先ほど会長が言われたように、博物館に置いて管理しなくてはならない重要な標本はたくさんあると思う。そのうえでいっぱいになるのが、移転後あまり時間が経たずに見えてきそうだという気がする。移転後、いっぱいになる、その先を考えないと。移転の準備を進めつつ他の施設の利用を考えないといけないぐらいの床面積かなと。収蔵の効率化で、現在よりも収蔵量が増えるにしても、何十倍も入るわけではない。数字を見て思った。

委員

私も全然知識がないなりに、ここを見て本当に収集保管エリアがこれだと大丈夫かなと思った。学芸員に今後の見通しを伺いたい。

事務局

数字だけでいえば学芸サイドからの見通しは十分ではないが、収集には終わりがない。当館の場合、９割以上、現在の１００万点の標本の９３％は外部からの寄贈による。寄贈は寄贈者あってのものだが、標本を集めている世代は長いスパンで見ると非常に偏っている。１９６０年世代生まれより後の人はほとんど標本を持っていない。今一番たくさん良質な標本を持っている世代がちょうど標本を手放すピークの時期にさしかかっている。しばらくは良質な標本が放出されるので、もうしばらく面積に対しての厳しい努力というのは続けていかなくてはいけない。あらゆる努力をして大切な標本は受け取って管理していきたい。

ただ、面積を増やすとか、建物を大きくするのは、建てるにも予算がかかり、できた後も管理で予算がかかる。いくらでも受け入れられる博物館はできない。バランスのことと、倉敷市として分相応というものがある。あらゆる面で努力をして、必要な標本はできるだけ受け入れ活用できる体制を整えるということを考えている。

会長

いろいろな議論が尽くされてこの基本計画はまとまったと思う。予算・時間・タイミングの事もあり、まずはこうしたことでスタートしようという形でまとまったものだろう。その事情を深く知っていない者が、とりあえず思うことを述べるが、そのあたりは市の方でこういう意見が出たということを踏まえつつ考えて処理していただければと思う。

利用者の立場から意見はあるか。

委員

自然史博物館は２～３年生が校外学習で利用している。これがライフパーク倉敷になると公共交通機関では行けず、バスを借りる形になる。バス代は高騰し、４年生は年３回ぐらい校外学習

で出るが、年２回に減らさないといけないことになり、行くことが難しくなる。今までライフパーク倉敷には４年生が行き、自然史博物館には２年生が来ていた。それを複合してバスの乗車人数をうまく調節して、そういうことまで考えて校外学習や遠足等に行かなくてはいけないのかなと思う。収蔵品については動くナウマンゾウがあったから２年生にはものすごく良かったが、新しい博物館では、結構、難しいものになるイメージがある。そうなると高学年が行くべきところになるか、低学年には適当な所か。できてみないとわからない。まだ像がぜんぜん浮かんでこないからこのようなことしか言えない。市の施設なので有効活用したいとは思うが。

会長
　駅前にある時よりもアクセスは難しくなるか。

委員
　そうである。路線バスで行ける学校もあるが、そうでないとバスをチャーターすることになる。１．５倍くらいではきかないくらいバス代が高騰している。

会長
　ライフパーク倉敷は駐車スペースは完備しているので、停めるところは大丈夫である。

委員
　どこかと一緒に来る形にすれば、効率は良くなってくるかと思う。

会長
　展示はなんとなく難しいか。

委員
　何がどこに展示されるかよくわからない。資料では初めての人でもいろいろなところをめぐれば面白いと感じられるのかなとも思う。興味がある人が行ってはじめて楽しさを味わえるのか、ポッと行って見てすぐ面白いと感じられるのか。PR の仕方もあるかとも思う。

事務局
　展示計画の、知りたい・学びたい・楽しみたい、という観覧者の興味の度合いで、まずは気軽に楽しみたい・学びたい・学習したい・深く知りたい、そういった人たちにバランスよく興味を持っていただける博物館を目指したいと基本計画では考えている。子どもたちも、自然に興味を持つ度合いはいろいろで、自然に興味がある子どもたちだけが楽しかったという博物館ではなく、大型の標本を見てかっこいい、すごいという入り口で楽しめるというのも考えている。そして、たとえば体験型であるとか、子どもたちにより一層楽しめる工夫というのもを基本計画で考えている。学校について、特に生徒・児童の身近にいる先生の協議会の場でのご意見というのは、今後の課題としたいので、ぜひご意見を引き続きいただきたいと考えている。

会長

展示物は現行の展示に比べて大型のものがたくさん入る予定になっている。たとえば体長１２ｍのティラノサウルス、体長１１ｍのクジラの全身骨格、直径２ｍのアンモナイトなど。それらが最初の「生命の大行進」のところにある展示案である。この最初のコーナーで素人というか、あまり知識を持っていない人でも興味を引く内容になっていると思う。入館者をぐっと引き付けたうえで、地元の倉敷について、それぞれの分野に関しての詳しい展示がある。初心者も、科学リテラシー・自然史リテラシーの高い人も満足できる、どんな層にでも対応できる構成になっていると思った。

委員

人の興味は一方通行ではなく、どんな年齢の方も、どんなバックグラウンドを持った方も、どこにフックがあるかわからない。どこで自分が興味を持つかはわからない。収蔵展示のところで、小さい子が、ピカピカしている、すごい尖がっている、とか単純なことを思いつく。それぞれの場所でそれぞれの興味に対応できる仕掛けや答えを用意しておくのが大事。

また、倉敷から世界を見るという切り口で見たときにどうなるのか。すべてのゾーンがうまく倉敷と世界とつながりをもって、いろんなところで倉敷を感じられるとか、そういうつながりがぶつぶつ切れているように見えるので、うまくつながっているのか。

会長

これは市立ではなく、県でやることではないか、国でやることではないか、という話はよく出る。これはどこでもそうだが、そのように考えるのではなくて、倉敷のいろいろな自然史のものは世界のいろいろなことと関連していて、そこにつながりを見いだせれば倉敷市立で世界的な展望が開ける場がここにできると捉えていただくというのも重要だと思う。そういう視点を念頭に置きながら全体の構成を考えていただければよい。

委員

校外学習などはバスで行くしかないという話があったが、その時に自然史に触れた子どもたちがリピートする手段として親の車で来るしかないというのが、もう少し何とかならないか。小学生は保護者がいないと学外に出られないこともある。保護者には、もう車は運転しないが、ついていくだけならと、祖父母が連れていくこともあると思うので、バス路線を活用する手段もある。今は埋蔵文化財センターなどのライフパーク全体の共通入館券付バスのチケットというがあるのか？　これが３館になるとより魅力的なチケットになると思う。欲をいえば倉敷市内の小中学生は、倉敷駅からライフパークまでのバス料金は無料になると、ものすごく子どもたちにとっては通いやすくなると思う。あるいは、チケットがあれば美観地区に来た観光客にもこういう場所があるのか、ちょっと足を延ばしてみようかという、効果も期待できると思う。観光客には、例えばある地域を訪ねるとその地域の植物園に必ず行くという方もおり、地元の博物館に立ち寄るという目的を持った観光客も相当いると思う。既存のバス路線を活用するソフトよりの方法・アイデアもあると思う。博物館の計画だけではなくて、バスの方の事もあると思う。もしそれを検討していないのであればぜひ検討していただきたい。

周辺のことでもう１点、ライフパークの基本計画になっているが、隣接して福田緑地・福田公園がある。こちらは公園緑地課のことと思うが、水路・池がある。その緑地自体を、自然史博物館移転後は公園部分の水路・池の岸部分にビオトープを整備するとか、その生き物を増やしていくというのを友の会と博物館が協力しながら、すこしずつ整備していけるというのも計画の中にあるのが良いのではないか。基本計画の最後の方に、ライフパーク倉敷周辺の山林などの自然環境を生かしたフィールドワークなど、というのがあり、その中に含まれていると思う。これを謳っているので公園緑地課等ともぜひ協議をしていただいて、博物館が移転した後、なにかできるかを考えていただければと思う。

事務局
具体的な話はないが、計画の中になるので、検討させていただく。

委員
私はここにくるのに２時間強かかる。ライフパーク倉敷には行ったことがない立場。もうすぐ、そこに新しい自然史博物館ができる、という PR もあると思うが、その時期に倉敷以外の方の多くは車で来る。導入部分でのインパクトの強さとか、例えば幼稚園とか低学年の子どもたちに強く印象に残り、もう一度、家族と一緒に行きたいとか、逆に中高生になって専門的に好きになったことをそこに行きもっと調べたいとか、発展的なことが可能性としてある。リピーターが増えるためのいろいろな演出は、最新の機材とか最新のツールが必要になるのではないか。収蔵しているものとかは、大変だとは思うが演出的に見せていける方が、より博物館に関わる人たちの仕事も感じていける。敷居の高さで博物館で働いている人が子どもたちに見えにくいより、展示してるのが見えるのも必要。ぜひ、遠方からでも来たいと思えるものを作ってほしい。
ひとつ気になるのが企画展示で、短い期間で行ういろいろな新しい企画をするというのもあると思う。それをする場所は特別展示室というところか。

事務局
特別展示室である。

会長
アクセスや展示内容のことが出た、市が税金を投じてやる事業なので、市民から支持されるのは必要な条件。お客さんがどこに興味を持ち、何度も来るというのはそれぞれ人によって違う。作業していることが見える、収蔵施設をガラス張りにする、学生ボランティア・土日の学生アルバイトの学生が土曜日に解説に出るとか、そういうことがきっかけになってそれがすごく面白いので何度も来てファンになるというのもある。展示は同じ形で作ったとしても、その中でひっかかるもの、フックというか、それをどんなふうに埋め込んでいくかというひと工夫があると観客がファンになるかどうかが変わる。非常に重要なことだが、作る側が楽しみながら、かつ愛を感じながらつくる施設は、おのずとそういうものになっていく。施設を作るときには、作らなければならないという時間・空間・予算が限られた話があり、それを意識してやる場合が多いが、その中で、楽しむとか愛を感じるとか、非常に抽象的な言葉だが、そういうものをもちながらプロ

ジェクトを進めるのが大事だと思う。それは市民の側としても大事だと思う。だからそういうところに時々われわれとか市民の方が参加でできる場があるといいと思う。そのようにしていただくとプロジェクトを進めている役員の方も学芸員の方も来る人のことを肌で感じることができるし、我々としても応援してみようかということが出てくるかと思う。

委員

収蔵スペースと調査研究室について、過去に収蔵展示とか研究室展示を作った立場からいうと、やはり嘘臭さがでる。お客さんの安全性と現場感を天秤にかけたとき、お客さんの安全性を確保しなくてはいけないので、そこを考えると、嘘臭さが出るところと、作ってからの運用によって現場感が出せるか、だと思う。当時はひんぱんに研究者に来てもらい、わざとそこに座って作業してもらったり、お客さんとラフに会話してもらったりとか、それこそクリーニングができるようなキットも、お子さんも研究者も使えるという、結構クオリティの高いキットを作ってやってもらったりしていた。また、新しい発見があったことをすぐにそこの研究室に掲示できて、研究者も説明できるようにしておくとか、運用次第ですごく現場感が出るが、そこがうまくいかないと逆に死んだただの映画のセットみたいになるので、そこが難しいと思う。

会長

倉敷市でお考えなのは、動いている所をガラス張りにするという事か、それともそういうダミーを作るということか。

事務局

詳細を伝えられる具体的なものは何もないが、今、お話のような、特に収蔵展示についてはバランスが難しかったりする点は承知した。

会長

委員の意見はダミーを作った場合に嘘くさいということか。

委員

収蔵はきれいではない。きれいなら展示です、というのが観覧者にわかってしまう。本当の収蔵庫だったら研究のために標本を頻繁に出し入れしていたり、メモが多く貼ってあったりなど、かなりディテールを作り込まないとほんとに嘘くさくなるので、そこは難しい。

委員

生態展示を一部でも取り入れたらどうか。水生生物は標本にすると液浸標本でも樹脂標本でも、生きた感じがなくなる。博物館は標本を収集して活用するのがメインだが。県内唯一の渋川の水族館は海洋生物がメインである。淡水魚・水草・水生昆虫で水道網とかの環境がわかる展示をしている水族館はないので、ぜひここの部分をこちらの博物館で展示してもらえると、すごく効果が高いというか、どの世代の方も水槽があるだけで寄ってくる。ぜひ取り入れていただきたい。

会長
　委員の意見でビオトープを作ったり、その水辺環境を利用するのは手間がかかる。友の会などボランティアが入り維持・発展できればと思う。ボランティア組織の運営は一筋縄ではいかない。移転先でボランティアが増えれば拡大していくが、そうならない場合にどんなことが必要か。倉敷市立自然史博物館がより多くの市民の支持を得て発展していくには市民参加が必要と思う。だれでも自分に関係があるところは応援・発展させようとするので、それは力になると思う。倉敷市立自然史博物館の市立の組織としての立脚点としてはそれが割と重要になると思う。

委員
　新しいライフパーク倉敷の共有スペースの憩いのエリアは単純に休憩スペースなのか、何かこういうことができるよという想定があるのか。

事務局
　想定では、会議とか休憩、オリエンテーション、修学旅行で来る生徒の荷物置場とか、お弁当を食べたりすることなどを考えている。

委員
　博物館で観察会をするときの集合場所や、雨天時の待合場所などか。

事務局
　そうである。

委員
　調査研究エリアは学芸員・市民研究者による調査研究の場となっているがイメージとして、例えばボランティアが動物を持ち込んで動物の皮をはぐという場合にそのスペースを調査研究エリアの中に確保するということか。３館共通で市民ラボというのができればいいと思う。

事務局
　工作室は調査研究エリアに含むという形でこの計画には記載している。

委員
　学芸員とか単発の人が使いにくいことが起こりうる気がするので、３館共通で、この期間こういうことがやりたいのでラボとして使える流しとかがあって、使えるスペースがあるとよい。

会長
　３館共通というとどれか。

委員
　自然史博物館・科学センター・埋蔵文化財センター。

会長
　自然史関係はわりと泥臭いものが多く骨格標本づくりだと臭いが生じたり。そういう場が必要。

委員
　展示の「大地と生きもののふしぎ」のコーナーで、学芸員が展示更新することが想定され、非常によい。ただ、観覧者に対して生命の大行進のコーナーがインパクトがあるので、これを移転後どのくらいで更新するか、メインの展示物で展示できる良いものが増え、それをどのくらいで更新するのか。基本計画で今の博物館は１７年間、展示更新していないのでいつ来ても同じで集客に影響しているとあり、エントランスの展示物を更新しやすいかどうかを考えているかどうか。できるだけ定期的に展示更新などができるようなことを計画段階から考えていただきたい。

事務局
　展示更新の考えは展示計画に示し、長期・中期・短期のエリアにおおむね３分割し、長期エリアは展示の更新はまずない。中期エリアは１０年を目処、短期エリアは学芸員を中心に館職員で年に２～４回として考えている。この更新が可能な展示をまずは作っていきたい。

委員
　不変的な展示というのも、どうにも古くなってくると作り変えるということが前提になるか。

事務局
　ティラノサウルスの骨格標本などは組んでも大変な作業になるので、そういったものであるとか、ある程度規模のあるジオラマであるとか、そういったものが長期に該当するのと考えている。

委員
　どのように中期エリアを更新するか。前に来た時とはイメージが全然違う、というところまで変えられるような工夫は必要かと思うので、それがやりやすい建物をしていただきたい。

会長
　大幅な展示更新は何１０年に１回とかということになると思う。長期の部分は全然変わっていないではなく、同じようなしつらえであっても、メディアが変わったり、新しい解説が加わったりして、ひとつの展示エリアの中に入っていたり、ちょっと方向が変わったり、レイアウトが少し変わってストーリーに変化が見られたり、新しい事実にもとづく説が解説に加わったりするのが良い。最初にすべて決まり、それに手が加えられないのではなく、いろいろな工夫を潜り込ませる余地がある基本設計なら学芸員がそれぞれの工夫にもとづき面白くなるよう手を加えられる。そのようにしていただくと見る側としても面白く、委員の懸念も軽くなると思う。

委員
　そのとおりで、展示は１回作ったら終わりではなく、どう運用していくかが重要。同じ標本を使ってもいろんなプログラムができたり、随時展示更新していくとかがある。例えば、１個の化

石標本でも、どう発掘されたか、歴史的な背景などの名前の由来とか、いろんな切り口がある。それを小出しにしながら、うまく運用していけば、楽しくなるのではないか。会長のいうとおり、最初に展示を作り付けると運用で変化がつけにくくなるので、臨機応変にできると良い。

会長

展示業者は工夫の余地のない見栄えのいいものを提案してくることが多い。学芸員の側にとって更新しやすい、見る側にとって少しずつ変わっているな、というのを実感しやすい展示設計と、「小奇麗に、見た目良く」仕上がってるけれど学芸員が手を入れにくい展示設計は、違う。前者を考えてほしい。

委員

最近は、展示室内でそこに行ったら画像が出現するとか、説明を聞けるとか、そういうデジタル機器を入り口で借りたりするところもある。テクノロジーでいろいろなことができると思うが、そのあたりは考えているか。

事務局

例えば、音声ガイドとか、AI を使用したものとか、さまざまなものがあるが、具体的なものは今後の展示で検討していく。

委員

人のガイドはすばらしい。デジタルで全部お任せではない、人が介して何か学べるようなこともあるとよい。先ほどのボランティアでもいいと思ので、ぜひ検討していただきたい。

会長

博物館のガイドでは、例えば、私が出て行ってガイドすると、お客さんは、私の話を一方的に聞き、質問しない。そのいっぽうで学生が説明すると、お客は相手が学生だからどんな質問もできる。学生は答えられないこともあるが、それは皆が思う疑問点で、「ぼくもよくわかりません」と学生がいう。そのお客さんは学生もわからないと共通理解をする。つまり、完璧に答えなくても、同じような疑問を持つ人もいるということでお客さんは安心する。そのようなものが生まれる余裕のある雰囲気の場になればよい。音声ガイドに関しては、すでにスマホが発達している。今から２０数年前はそれをシステムとして作るだけでも大変だったが、今は２次元コードを展示室に埋め込み、そこからユーチューブに飛ぶようにすればシステムを構築することは難しいことではないので、スケジュール的に余裕ができたら考えていけばよい。

委員

私はある昆虫館に関わって、その施設周辺の昆虫調査を定期的に時期を変えてしている。ライフパーク倉敷周辺の昆虫調査等を博物館友の会で時期を変えつつやって、それをきっかけに先ほどの委員の意見のように、福田公園の生物相などに子どもの興味をひくような計画はあるか。

事務局
　具体的にはないが想定はしている。昆虫だけでなく全分野で。建物の中の展示の見学が基本だが、そこから身近な自然に興味を広げていただき、われわれが今でも行っている自然観察会や講座などの普及活動の実施において建物外の周りの環境を活用していくことは想定している。

委員
　福田公園は何回か行ったが、この時期だったらギンヤンマもたくさん飛んでいるし、昆虫好きな人にはいいところと思っている。

会長
　小学校では福田公園の公園部分を遠足で行くということはあるか。

委員
　ない。消防署などが目的。高学年だったら少し前ならカルチャーゾーンを何か所か回るとか。昔は少し遊びの部分があったが。今はどうしても保護者負担が増えるから絞り込んだことをしないといけない。たとえば、自動車工場を見学した帰りに、福田公園によって１時間ほどお弁当を食べがてら時間をつぶして帰る。大きい学校だったら工場に４クラス全部入れないから、２クラスずつ入れ替わりみたいなことでの活用はあるが、福田公園だけに行くということはない。遠足よりも、社会科見学か、生活科での校外学習かという形になってきている。
　現在、自然史博物館は高校生以下は無料だが、移転後はどの程度の入館料にするのか。今はどこの博物館でも３００円はかかる、しかも、高校生も大学生並みの入館料を取っている。中学生以下無料だったら、今のような利用の仕方が継続的にできるのでいいかなと思う。現在の黒字状況・赤字状況は気になるが、この金額で継続は無理と感じる。そこは想定できているか。

事務局
　開館も先になるので、その協議は先になると思う。

委員
　企業でも地域還元施策で市内の小学生なら無料ということもある。大原美術館でも市内の小学生の見学では無料だったりするので、地域の学校は少し優遇していただきたい。先ほど委員の方からいわれたバス代と入館料をセットにということもそうである。そのような金銭面がどの程度この先にわかってくるのか。反面、赤字になって自然史博物館の運営が難しくなるのも困る。

会長
　通常、博物館の入館料収入というものは、どこでもたいてい全運営費の１割未満である。
　なお、自然史博物館・科学センター・埋蔵文化財センターが一緒の場所になることに関しスケールメリットというか、今後それを活かしていくという展望はあるか。
事務局
　具体的には未定だが、それぞれの役割を果たしつつ連携し、一体となって知の拠点を目指す。

会長

自然史博物館・科学センター・埋蔵文化財センターはそれぞれ手法・対象が異なる。別々の館が歩調を合わせるというのが難しいこともあるだろう。観覧者からは一緒にやってくれたらいいと思う。そこは館長やセンター長が集う談話会のようなもので情報を共有し、福田公園エリア全体が盛り上がる方向で考えられる基盤が出来たらと思う。

最後に、今回いろいろな切り口の意見が出たが、このプロジェクトが今後数年の間に進んでいく時、様々な問題が生じ関係者は大変だろう。繰り返しになるが、やはり、関係者が倉敷市民を世界につなぐ場を作るという、その施設づくりに愛をもって楽しんでやっていくことが必要。いい施設になるためにはそういうことが必要だと思う。

７　閉会あいさつ

事務局（館長）

失礼いたします。本日は、たいへんお暑い中、お集まりいただきまして、さまざまな分野からたくさんのご意見をいただきまして本当にありがとうございます。いただいたご意見、ハード面での整備のこと、それから開館後の運営の在り方のこと、等々あろうかと思います。整備につきましてはもちろん私どもとともにそれぞれの建設業者でありますとか展示業者と一緒に考えていくようになりますが、運営面についてはもっぱら誰かほかの方ということではなく、私どもの方が考えていかなくてはならないということで、こちらの方はみなさんのお力を十二分にお借りしながら、博物館を作ることがゴールではございませんので、そこがスタートとなるような博物館にしたいなと思っております。

もう一つ石垣会長から最後に締めくくりのところでお話をいただきましたけれども、実は基本計画の中の１０ページにですね、前提ということで、自然史博物館の基本構想というのを掲げさせていただいております。これは昭和５８年にこの館が開館する１年前に、こういう博物館を作ろうと思うんだけれども、どうであろうかということで市民の方に、議案としてお示ししてですね、ご議決をいただいたものでございます。この度の博物館にあたっては、原点に、最初に倉敷市が博物館を持とうとした原点にやっぱり立ち返ることが重要ではないかと考えておりまして、この博物館基本構想を非常に大切にしながらあらためて新しい博物館像を考えております。その中で奇しくも石垣先生がおっしゃいました、まるの３番のところに開かれた博物館ということで市民に支えられたみんなの博物館、すべてが楽しくということで楽しく、それから支えられているといいのはやっぱり愛されている博物館かなと思っておりまして、そういう思いをそういう博物館になりたいという思いを込めて作ったのがこの新しいロゴでございます。何となくわくわくした感じでですね、ぜひ博物館にいっぺんは行って見たいなというふうな博物館に、市民の方に楽しんでもらえて愛される博物館をぜひ作りたいという思いで今後も一生懸命、考えていきたいと思っております。皆様のお力添え、ご支援は欠かすことはできません、今後ともぜひよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

８　閉会

事務局

以上をもちまして令和６年度第２回倉敷市立自然史博物館協議会を閉会いたします。

閉会後、特別展「ぼくらのまちの７つのみどり」展示解説

以上を、令和６年９月１９日開催の令和６年度第２回倉敷市立自然史博物館協議会議事録（要旨）とすることに同意します。

令和６年 11 月 23 日

倉敷市立自然史博物館協議会
会長　石垣　忍　印